

『平家正節』をめぐる課題

山下 宏明

一 声の世界

過日、シンポジウムの場で、わたくしの記憶に誤りがなければ、講演者、薦田治子は、江戸中期、荻野検校が定めた『平家正節』は、なかば当道座の正本と化し、「正節」の名称が固有名詞から共用用語、一種の普通名詞化していたと言う。荻野検校が権威化、制度化していたとすれば、課題として、改めて、かれが平家の譜本を正本化する、その意図は何だったのか。口承を本意とする語りを文字化するとは、どういうことなのか。同じ思いが、日頃、平家読みの課題の対象とする覚一本についても考えて来たことであるのだが。

最近、その覚一本を読んでいて、ふとわからなくなったことがある。

たとえば物語の巻二、「少将乞請」の句の一節である。巻一、後白河院の側近、藤原成親が鹿谷に平家追討の謀議を行う。その謀叛に引き込まれた摂津源氏の多田蔵人行綱が平家の威を見て、日和見、謀叛を平清盛に打ち明ける。驚く清盛が、まず成親を召喚して、問いつめ、結局、備前へ流刑に処し、現地で死に追いつめることになるのだが、清盛はその子息の成経をも連座させ、おりから院御所にあつたのを召喚する。かれの北の方の舅、平教盛を心配させることになるのだ

が、成経が、事を院に報せようとする。その場を覚一本は、

女房達御前へ参^ッて此由奏せられければ、法皇大におどろかせ給て、さればこそ。けさの入道相国が使ひに、はや御心得あり。あは、これらが内々はかりし事の洩れにけるよとおぼしめすにあさまし。さるにてもこれへと御気色ありければ、参られたり。

と文字化する。

この傍線部の「御心得あり」の主語はだれなのか。法皇だろう。とすれば法皇がみずからの行為を尊敬語を駆して語ることになる。事実、多くの注釈書が、これを自敬語と解釈する。ところが、事が洩れたと気づく法皇が「さるにてもこれへと御気色ありければ」と語る主体はだれなのか。それは語り手であろう。この一文が微妙で、「これへ」の言語主体は法皇だろう。「御気色ありければ」の発話主体は語り手である。つまりこの言説は法皇と語り手自身の語り相互乗り入れしている。ちなみに覚一本の前段階を濃厚に残していると思われる屋代本では、問題の言説を

女房達御前へ参^テ此様^ヲ被^ル奏^セ 法王サレハコソ今朝ノ入道カ使ニハヤ心エツ是等カ内々ハカリシ事ノ漏ニケル
ヨト思召テサテモ成経今一度是へ参^レト気色有ケレハ世ハ怖^シケレトモ被^レ参^タリ

と語る。つまり問題の法皇の言説を心内語として整理している。読み本の延慶本は、

兵衛佐（女房の召し名）御前ニ参^テ此由ヲ被^申ケレバ法皇モ大ニ驚^セ給^テ是等ガ内々謀^{ハカ}リシ事漏^モレニケルヨナト
思食モ浅猿シ今朝相国ノ使ノ有ツルニ事出ヌトハ思食ツサルニテモ是へと御気色有ケレバ（中略）御前へ被^参タリ
ケレトモ

も屋代本に通じる語りである。ところが、語り本では、室町時代のテクストと思われる葉子本が

女房達御前へ参^ッて此由奏聞せられければ、法皇さればこそ、今朝の入道が使にはや御心得あり。さるにても是へ是へと御気色有りければ、少将御前へまゐられたり。

と、覚一本に近い。あえて言えば覚一本が「法皇大におどろかせ給て」と語ることによって主語の法皇を明示している。

言いかえれば法皇への同化を強くしている。念のために流布本を見ると、

女房たち急ぎ御前へ参つて、此の由奏聞せられたりければ、法皇、今朝の禪門の使に早御心得あつて、これ等が内々謀りし事の洩れ聞こえけるにこそ、さるにても今一度これへと御気色ありければ、少将御前へ参られたり

とあり、下村本も

女房たち御前へ参てこのよし奏聞せられたりければ、法皇さればこそ、今朝の禪門のつかひにはや御心得有て、さるにてもこれへと御気色有ければ、少将御前へまゐられたり

とあつて、流布本に近い。書記言語として主語を明示し、文章として整序している。

この流布本については、その版本の刊記に

元和七年（一六二一）「一方検校衆以数人之吟味」云々と記す。その言説は、いずれも主語を明示、覚一本などよりも明確に改めている。

さてここで、今回課題の『平家正節』（尾崎本。青州本同文）は

口説 女房達いそぎ御前へまいつて此由奏聞せられたりければ法皇は今朝の禪門の使にはや御心得有てさるにても今一度是へとの御気色有しかば少将御前へまいられたり

とあり、『秦音曲鈔』（波多野流）も

口説 女房達歸り参つて此由奏聞せられたりければ法皇今朝の相国禪門の使にはや御心得有て去にても今一度是へと御気色有しかば少将泣々御前へぞ参られたる

と、『正節』と変わらな。

この覚一本から江戸の譜本への間に、どのような声と文字の出会いがあつたのか。当日わたくしが提起したのは、この課題であつた。

『正節』の原点である覚一検校、それに『正節』を定めた荻野検校もこの課題を考えたはずである。「人民」の中、民

間宗教・信仰の中に生きた琵琶法師が「平家」の物語を語って来た。それは、どうということか。中世から江戸時代にかけて、「平曲」が式楽化したと言われる。その意味を考えようとしたのだった。

問題の言説について、わたくしの思いを述べるならば、覚一本、それを継承する葉子本の場合、琵琶法師の物語内の語り手への接近と相克が揺れとなってその痕跡を濃厚に残している。その結果が、自敬語であるかに見える言説を残すことになったのではあるまいか。「自敬語」の概念については、改めて言語学の成果を通史的にも検討しなければならぬ。今回は、平家語りの課題として、声と文字の課題として提起するにとどめる。早く覚一や室町時代の当道座が「句」を立て、天草本平家の底本になったと思われる百二十句本が、各巻を十句仕立てとした、そして『正節』が「巻通し」を考案した。それぞれの意図が何であったのか、晴眼者のための配慮であることは自明のことなのだが、晴眼者と、本来の語り手である盲人との間には、越えられない溝があるだろう。それは、まだ確認されていない。流布本以下、譜本の登場には、文字テキストとしての整序もなされているのだろうか。江戸時代の平家琵琶の実態がほの見えている。そうした中での琵琶法師の語りでもあった。尾張藩や津軽藩で藩士たちに愛好された「平曲」平家（琵琶）の実態であったことを楽理の上からも検討していただきたいというのが、今の思いである。

二 音読と平家

もう十数年も前のことだが、斎藤孝らが国語教材の音読を課題として提唱したことがあり、それは今も続いている。特に木下順二は「群読」に、ことばのドラマを実践した。それが斎藤らの朗読謳歌の契機になった。実は、朗読は小学校で、入学以来、先生方が、それを実践しておられたし、今も変わるまい。フランスでは作文の力を養う方法として、名文の暗誦を行っていると、亡き友人のフランス文学者から耳にしたことがある。

物語を声に出して語る、それを聴くとは、どういうことか。院生だった頃、NHKラヂオ放送の森繁久弥・加藤道子の日曜名作劇場の楽しかったこと。わたくしの木下体験の背後に、このラヂオの声のドラマがあったし、物語があった。上京してテレビとの縁を切ったわたくしにとって、週に一度の楽しみだった。今も、番組を始める主題曲を思い出す。

木下順二の「群読」に参加した俳優の山本安英の体験を読みながら考えるのだが、盲目の民間宗教家である琵琶法師が、たとえば「那須与一」では、屋島での場の中心的人物、与一が、後藤兵衛と判官の三者、それに緊張する場を見て固唾をのむ源平両軍の武士の前を動く。琵琶法師が、これらの人々の役柄を演じ分けねばならない。物語の台本は固定していて、第三者としての語り手が、その立場を堅持しつつ、しかもその中の複数の人物を演じ分けねばならない。その分析をとおして物語理論の再確認が要請される。この難しい役を演じ、語るとはどういうことか。第三者としての語り手の立ち場を琵琶法師はどのように意識したのか。与一は判官を意識し、判官は後藤・与一を意識し、後藤も判官を意識しながら登場し、琵琶法師は、これらの人物の声を多声的に語らねばならないし、聴く者は、その声を聴き分けねばならない。

盲人に文字の世界は無いと言えるかどうか。われわれ「平家」を聴く者は、物語世界の外にあって、文字を介して読んでいる。そういうわれわれが検校の語りを聴いている瞬間、はたして文字を意識しているだろうか。荻野検校のまわりにも、このわたくしのような第三者がいたはずである。『正節』が生み出される場には、このように困難な課題があったはずである。木下順二の「群読」を契機に高校において、『平家物語』の群読が今も行われていることを、昨年の能楽学会で体験したのであった。語ること、聴くこと、読むことの関連を考察・議論すべき段階を迎えているし、その成果もすで見られる。文学の行方が危機を迎えている現在、無視できない重要課題であると思う。

音読の先端を切った山本安英その人が、朗読劇を演じながら、目で読んで、見落とすのあったことに気づいたと言う。音読しつつ見落とすことがあったはずで、早く名古屋の、今は亡き検校が、わたくしに質問を発し、驚かされたことがあるし、近くは、ハゴロモの公演で、木下順二の『子午線の祀り』にも出演した岡橋和彦が、『小教訓』の一節につい

て疑問を提起、実は文脈を想定して、一呼吸置けば意味の通じること、そこには曲節の課題のあることを指摘した結果、氏は、以後、これを意識して語り、演じるように思われる。つまり黙読により文脈を探る必要のあることがわかったのであった。その文字は記憶力を強化する一方、声の力を麻痺させる。聴くことと読むことの乖離。中・高校の音読授業の中で、このような課題が意識されているのだろうか。語ることと、聴くことの相互乗り入れの必要なことを考えざるを得ない。

無文字の世界における語りが、それをどのように考えていたのか。高木市之助が平家琵琶の中の親しみのある〔口説〕の曲節に論じたのだった。研究の課題とすれば、これを現実に多様な曲節を使い分けて語ることをどのように考えるのかも、避けて通れまい。わたくしの課題である。

三 テクストを語るということ

盲人の語りを考える場合、兵藤裕己が提起する肥後琵琶、山鹿良之の演唱、「語り」が重要な課題を提起する。兵藤のフィールド調査によれば、山鹿の語りは、上演の場の違いによっても毎回動く。盲人にとって文字の世界は外部の世界であろう。その山鹿が、上演の場になると、語りが標準語に変わると言う。つまり、口承の世界でありながら固定への傾向を見せると言うのか。

ことが木下順二の群読になると、さらにむづかしくなる。群読には固定した文字テキストが存在すること、その作品テキストに見るとおりである。それを山本安英ら出演者の、まず声としてのドラマを実験しようとした。『群読による知盛』から、演技を伴う『子午線の祀り』へと展開する。山本安英の体験として、語り、朗読することと黙読することのずれを感じたのだろうか。演技を加えたのは、どういう意図があったのか。

この群読をさらに徹底するのが橘幸治郎を軸に、原典、覚一本を維持しながら、それを音読し、演技し、各種楽器を織り込むハゴロモの実験、上演である。

四 派生する数々の課題

今なお、わたくしのこだわるところだが、曲節と本文の関係は、能の場合のそれと無縁ではあるまい。

高木市之助が提起した口説論、金田一春彦が提起した平家（琵琶）の構成（場所）と素材の内容など、さらに能や平家についても、その演技を抜きにしたわたくしの「読み」が、どのように生産的であり得るのかは、わたくし自身の課題である。現在「平家」が能ほどの観客を集めないことを、中世に源を発する芸能について考えさせるのだが、それを現代芸能として破ろうとするのがハゴロモの「原典を読む会」であるのだろう。今回のパネルが検討の契機を作ってくださったことを感謝する。

（名古屋大学名誉教授）